

2021年1月24日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 51 : 18～19

ルカによる福音書 11 : 37～44

「外側と内側」

<幸いなのは、神の言葉を聞き、それを守る人>

今わたしたちは、ルカによる福音書 11 章の御言葉を、何週かに渡って聞いています。今日から、11 章の終盤の部分に差し掛かります。

11 章のはじめの方では、イエスさまが「主の祈り」を弟子たちに教えて下さったことが語られていました。人々を救うため、神から遣わされた神の御子イエスさまは、これからご自分の十字架の死によって、すべての人に罪の赦しを与えようとしておられます。そして、この救い主であるイエスさまを受け入れ信じる者を、天の神さまは、ご自分の子どもとして受け入れて下さいます。だから、イエスさまは弟子たちに、御自分の救いにあって、万物の創造主である神を「父よ」と親しく呼び、安心して頼り、祈りなさい。求めなさい。そうすれば、与えられる。そう教えて下さいました。

それから、イエスさまは御自分が神の力で、悪霊に打ち勝つ方であることを語って下さいました。イエスさまこそ確かに、神の力で悪を打ち破り、神のご支配を実現するお方なのです。

だから、このイエスさまが今語っておられる「神の言葉」、救いの約束、神のご支配の実現を聞いて、受け入れ、信じる者は幸いだ。「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」これは 11 章 28 節の御言葉ですが、イエスさまは、そう語られたのです。

イエスさまが語られる神の言葉、救いの知らせは、わたしたちにとって、闇を照らすともし火であり、光です。

今、目の前にはっきりと置かれたこのともし火の光を、澄んだ目を見開いて、ただ素直に光を見つめるならば。わたしたちはその光によって、自分全体が明るく照らされていること、光の中にいることを知ることが出来ます。

同じように今、イエスさまが語られる「神の言葉」を聞いて、それを素直に受け入れ信じるならば。わたしたちは、神さまが差し出して下さった救いのご計画の中に、大きな愛の中に、自分が確かに置かれていることを知ることが出来るのです。

しかし、神の言葉を聞いているのに、救いが差し出されているのに、目の前にともし火が置かれているのに、目を閉ざし、耳を閉ざし、それを受け入れないなら。イエスさまを拒否するなら。あなたは暗いままである。照らされている光を、自らの目の濁りのせいで、暗いままにしているのだ。与えられている恵みを、神さまの愛を、自ら拒否しているのだ。

先週のところでは、イエスさまはそのようにお語りになったのです。

だから、イエスさまは問われます。今、この言葉を聞いている、あなたはどうか。澄んだ目で、目の前に置かれたともし火を素直に見つめ、あなたが光の中に置かれてことを認識しているか。あなたの罪を赦すために、神に遣わされ、今ここにわたしを、差し出されている神の救いを、あなたは受け入れ、信じるか。それとも、濁った眼で、光を受け入れない目で、暗いところに留まるのか。わたしを受け入れないで、恵みを拒否して、罪と死の中に留まることを選ぶのか。あなたは、神の言葉を聞き、それを守る。イエスさまを受け入れ、神の愛を受け入れ、恵みの中に留まる。そのような幸いに、与ろうとしているか。

わたしたちもまた、このように問われているのです。

### <ファリサイ派と律法学者>

そして、今日の37節以下のところでは、28節で「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」、と言われたことと反対に、「不幸だ」と言われる人々が登場します。

人々にとって、神さまの愛の言葉を聞いて、イエスさまを受け入れて、救いの恵みに生きることこそ幸いだ、と語られたその後で。神の言葉を聞きながらも、その言葉に耳を傾けず、イエスさまを受け入れず、神さまの御心から離れてしまっている人々を、イエスさまは「不幸だ」と言って嘆かれたのです。

ここに出て来るのは、ファリサイ派と律法学者たちです。今日はファリサイ派の人々のところだけを読みます。ファリサイ派とは、ユダヤ人の中で、神の律法を正しく守り、神の民にふさわしく清くあるために、人々の信仰や生活を事細かに指導する人たちでした。

彼らが厳密に正しく守ろうとした「神の律法」、「掟」。これは、ユダヤ人の祖先、イスラエルの民が、エジプトから救い出された時に与えられた、「神の言葉」です。そして、その神の言葉である律法や掟は、イスラエルの民が、神をまことの神として歩むために、神の救いに感謝し、神のものとされた民としてふさわしく歩むために、神さまから与えられたものでした。

ファリサイ派の人々は、この神の律法、神が語られたことを、厳格に、綿密に、一部の隙も無く、生活の一挙手一投足にまでこだわって守ろうとした、真面目で熱心な人々でした。

だから、もし当時の人々であれば、「神の言葉を聞き、守る人」というのは、ファリサイ派の人々だ、と答えたかも知れません。神の律法を誰よりもよく知り、字面通りに、一文字も間違わず、正しく、精確に守っており、また、そうするように人に指導していたからです。

しかし、神の律法というのは、ただ表面的な、形式的なことではないのです。それは、生きておられる神さまが語られる言葉なのです。神さまの愛が込められたものであり、また、これを聞く者に、神さまの愛を受け止め、神さまを愛することを求める言葉なのです。

この神の言葉を、正しく聞いているか。神の愛を受けとめているか。神の御心を知ろうと

しているか。それに心から答えようとしているか。

そう本質を問うのであれば、ファリサイ派の人々は、神の言葉を聞いていない。神の御心に従っていない。不幸な歩みをしているのだ。イエスさまはそう仰るのです。

#### <器の外側と内側>

さて、ことの始まりはこうです。37 節から、「イエスが話し終わると、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、驚いた。」

ファリサイ派の人は、神の律法に従おうとするために、食事の前には身を清めることが常でした。これは、今のコロナの時代のように、衛生的にそうしなければウイルスやバイ菌が付くから、という理由ではなくて、宗教的な汚れを遠ざけるためです。

ユダヤ人たちは、神の民であるために、神の御前に出るにふさわしく、清くあろうとしました。そのため、汚れを遠ざけることに神経を使うようになり、汚れたものに触れないように、罪を犯した人と交わらないように、知らない間に汚れたものに触れてしまっても、その汚れを清められるようにと、律法の周辺に、数多くの掟や規則を造りました。食事の前に身を清めるのも、その一つです。

これほどに汚れを嫌う彼らです。その席に招かれたイエスさまが、掟通りに身を清めなかった。それで、ファリサイ派の人は「不審に思った」とあります。これは、「驚く」という言葉です。彼らからすればあり得なかった。会堂で人々に神の言葉を語り、神の力を示し、神の支配を告げる者が、掟を守らない。いっどこで、罪人と触れ合ったか分からないのに、いっどこで、汚れたものを触ってしまったかも知れないのに、そのままで食事をしようとしている。それは驚くべきことだったのです。

しかし、主は、イエスさまは言われました。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにするが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。」

イエスさまは、律法や掟の形式ばかり守り、それで神さまに正しく従っていると思っていること、そして他の人々からも立派な信仰者だと思われるファリサイ派の人々を、「杯や皿の外側はきれい」にしている、と言われました。しかし、中身は違う。器の内側は、強欲と悪意が満ちている。外側は美しくしているが、中身が伴っていない。外側と内側があべこべだ。そう指摘されました。

そして、「外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか」と言われたのです。器があったとしたら、その外側と内側を分けることは出来ません。それは表裏一体です。わ

たしたちをお造りになった神さまは、このわたしたちの体も、心も、命も、魂も、一つのものとして造って下さいました。だから、わたしたちの外側も内側も、本当は一致しているはずだし、外側も内側も、体も行いも心も魂も、すべては神さまのものなのです。

それなのに、外側だけ神さまにすべてをささげているように見せかけて、中身は自分の欲望や悪で満ちている。内側にある自分の強欲や悪意を満たすために、外側を良く見せかけているだけなのです。神さまの愛の言葉を心から受け止め、愛をもって神さまに応答していません。それは、いくら掟を正確に守っていても、「神の言葉を聞いて、守っている」ことにはなりません。神の言葉をちゃんと受け止めて、神の愛をしっかりと受け止めて、それにお応えして歩んでいる歩みではないからです。

だから、イエスさまは言われました。「ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。」

でも、彼らの器の中にあるものとは、強欲と悪意だけだったのではないのでしょうか。人に施せるような物は、その器の中に入っていないんじゃないのでしょうか。

・・・でも、だからこそ。人は自分の器を空にして、神さまに内側を良いもので満たしていただくなくてはならないのです。自分の強欲や、悪意を捨て、神の言葉を内側に満たす。神さまの愛を内側に満たす。神さまの恵みで満たされる。そうして初めてわたしたちは、内側にあるものを外側へ。神さまに満たされた心から出る、愛や、行動や、施しを、隣人に与えることが出来るのです。

そうすれば、すべてのものが清くなるのです。内側が、神さまによって満たされることによって、外側も、神さまに喜ばれるものとなる事が出来るのです。

人は、内側も外側も神さまに空け渡し、神さまによって新しく変えていただき、神さまによって恵みを満たされてこそ、神さまに喜ばれる心を持ち、神さまに喜ばれる行いをする事が出来るのです。

これが、神の言葉を聞き、これを守る人なのであり、また最も幸いな生き方なのです。

<不幸だ>

しかし、ファリサイ派の人々は、そうではない。内側に、神さまに背く思い、自己中心的な思いを抱えながら、外側ばかりをよく見せようとしている。その例が、42 節以下に「あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ」という言葉と共に三つ、語られています。

一つは、「薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もおろそかにしてはならないが。」と言われていることです。

十分の一献金は、神さまに仕える者たちの生活を支えるための、神の民の大切な義務です。そして、この掟を厳密に守るために、薄荷や芸香、野菜の一つ一つまで、精確に細かく十分の一をちゃんと量って、献げていたのです。これは、とても大切なことです。だからイエス

さまも、「(これも) おろそかにしてはならないが」と言っておられます。

しかし、そうやって細かく正確に義務を果たしていることの内側で、その根底にあるはずの、神さまへの感謝。神さまに仕える思い。隣人を大切に思う思い。それが欠けている、とイエスさまは言っておられるのです。

義務を果たしてさえいれば、掟を厳密に守ってさえいれば、それで正しい、それで十分、という訳ではありません。生活のすべてで、正義を実行すること。生活のすべてで、神へ愛をささげること。積極的に、神を愛し、隣人を愛すること。これが欠けていては、意味がないのです。これこそ、規則を守るために薄荷を十分の一きっちり正確に測ること以上に、日々の生活の中で、神さまに対して、また隣人に対して、行なうべきことなのです。

二つ目は、「あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。会堂では上席に着くこと、広場では挨拶されることを好むからだ。」とされています。

彼らは人々を指導する立場であるゆえに、会堂の一番良い席に着き、また人々から重んじられ、丁寧な挨拶を受けていました。そして、そのことを喜んでいました。

指導者に対して、こういう態度が人々から現れることは、むしろ自然なことかも知れません。人々の尊敬や挨拶は、「神の言葉」に従う生活を導いてくれるがゆえの尊敬であり、感謝の挨拶なのです。

しかし、指導者の方から、人々のこういった尊敬や、特別扱いを望んだり、気にしたりすることは違います。それはやがて、あたかも自分自身の立派さを誇るものとなり、自分の栄光や誉れのように思われてきます。そして、さらに人に重んじられ、大切にされることを求めるようになります。

それは、神さまの御前で、神さまの目に適うことを望む生き方ではなく、人々の目を気にしつつ、人々に良い評価をされることを望む生き方なのです。神さまに向かう生き方ではなく、人々に迎合する生き方なのです。神さまの御言葉、御心に従っているのではなく、自分の満足を満たす思いに従っているのです。

そして三つ目に、「あなたたちは不幸だ。人目につかない墓のようなものである。その上を歩く人は気づかない。」とされています。

墓というのは、汚れたものであり、触れてはいけないものなので、普通はここにお墓がありますよ、と分かるようにされていました。しかし、人目につかなくなっている。隠されている。だから、見た目では分からない分、人々は気付かずにその墓の上を歩いて、汚れに触れてしまうということです。

人々は、見かけは神の律法を正しく守っているファリサイ派を疑うことなく、彼らの心の強欲や悪意に満ちた内側に気付いていません。だから、喜んで彼らの指導を受け、誤った歩みへと導かれてしまっている。そのことを表しているのです。

イエスさまは、このようなファリサイ派の人々は不幸だ。神の言葉、神の愛、救いの恵み、そして神に遣わされたイエスさまを、素直に受け入れず、恵みの光を遮断している。神の本

当の御心を知ろうとせず、自分の心に従って、暗闇の中を歩こうとしている。そう言って、嘆かれたのです。

<わたしたちもまた>

ここまで聞くとわたしたちも、確かにファリサイ派の人々は酷い有様だ。イエスさまに愚かな者たちとか、不幸だ、と言われるのも仕方ない。そんな風に思うかも知れません。

でも、大切なのは、これをわたしたちも問われている、ということです。

クリスチャン、キリスト者というのは、いつも正しくて、真面目で、品行方正でなければならない。人に親切で、ボランティア精神があって、人が嫌がることを進んでするような人格者でなければならない。わたしたちは、自分でもそういうイメージがあるかも知れませんし、世の人々も、そんなイメージを抱いているかも知れません。

以前、わたしが友達に自分は教会に行っていると打ち明けた時、友達から「わあ～、すごい！なんか清らかだね」と言われてしまい、とても戸惑いました。この子の前では、あんまり調子に乗ってふざけたりできないな、と思いました。

そういう「クリスチャンらしい」態度や、振る舞い、清さが、見せかけではなく、本当に神さまに救われた喜びに溢れ、神さまの恵みに満たされて、心を動かされて行動に表れているものなのであれば、それはまことに素晴らしいことです。それは、神を愛し、隣人を自分のように愛しなさい、という御言葉に、喜んで従おうとしている姿だと言えるでしょう。

しかし、世間のイメージに答えなければいけない、あるいは、自分はクリスチャンらしくならなくてはいけない。そういう思いから自分の態度や行動を決めるのなら、それは神さまの目ではなく、人の目を気にしているのです。心を満たして下さった神さまの愛に応えるためではなく、自分の内側を人々に賞賛されることや認められることによって、満たそうとしているのです。

内側が、神さまの恵みによってではなく、自分の思いに満たされて、外側をきれいにしようとしているならば、一時は良くても、それは時間と共に力尽きてしまうでしょうし、ただただ身を削るだけの苦しいものになるのではないのでしょうか。それで、人からの評価が得られなければ、怒ったり、傷ついたりする。他人がどう評価されているかも気になりだして、比べたりする。勝手に劣等感を抱いたり、あるいは人を批判したりする。こうなってくると、それこそ不幸です。

また一方で、心で、自分は確かに信仰を持っている。神さまを愛し、隣人を愛している。そう思い込んでいながら、礼拝を大切にせず、すぐ隣で苦しんでいる隣人に手を差し伸べないなら、それも、内側と外側がバラバラになっているのだと思います。

心も、体も。内側も、外側も。神さまが造って下さったもの。神さまに愛されているもの。神さまが救って下さったもの。わたしたちは、そのような、神さまのかけがえのない器として造られ、そして、そこに神さまの愛を、救い主であるイエスさまの命を、溢れるほどに満

たされて、生きています。

わたしたちは、内側にある自分の強欲や悪意を外に出し、自分中心の思いを捨てて、イエスさまの恵みをすべて、しっかりと受け止める器になりたいのです。

天の父なる神さまは、ご自分の御子を与えて、その命を豊かに注いで、わたしたちが内側も外側も、すべてを神さまのものとされて、幸いに生きるように。神さまを愛し、神さまと共に生きるように。隣人を自分のように愛し、良い交わりを築いて共に日々を歩いていくように。そのような、恵みの道を備え、招いて下さっているのです。

イエスさまが「幸いだ」と言って下さる、「神の言葉を聞き、これを守る人」とされるように。神さまに喜ばれる器となることが出来るように。わたしたちは聖霊を求めて、祈りたいのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたが、わたしの内側も、外側も、すべてを創造して下さいました。わたしのすべては、造り主である神さまのものです。そして、神さまはそこに愛を注いで下さいます。御子イエスさまの恵みを、命を、注いで下さいます。

しかし、わたしたちは外側ばかり繕って、人の目を気にして、内側は自己中心な思いで一杯になり、あなたの恵みを受け止めることが出来ない者です。どうか聖霊によって、わたしたちを内も外も、新しく変えて下さい。自分の強欲や悪意で満ちた器を空っぽにし、あなたの恵みを豊かに受け取る器として下さい。

そして、神さまの愛と恵みに満たされた感謝と喜びに、心から動かされて、わたしたちの行ないや、生活や、歩みもまた、神さまに喜ばれるものとなりますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン